



タイトル 地名は警告する

編 者 谷川健一（たにがわ・けんいち）

出 版 社 富山房インターナショナル

発 売 日 2013年3月27日

ページ数 281頁

本書の編者は、柳田國男、折田信夫らが没した後に、在野にあつて独自に民俗学を探求し、全国各地に及ぶフィールドワークによって裏打ちされた谷川民俗学を確立した人と言われている。

本書の副題は、「日本の災害と地名」であり、日本列島は狭小な土地柄で山地がいきなり海に接して平野が少なく、急峻な河川が大部分であり、四周は海に囲まれている。こうして自然災害に侵される危険な地形に満ちており、おまけに地震列島なので、当然のことながら、地名もまた危険を予知するものも少なくない。

それらの地名は、「ここは危険な地域だから、普段から警戒を怠らぬように」と予告しているのである。それは、地震や洪水や津波に対する警告に留まらない。人間が大自然の中の存在であることを忘れないようにとの警告である。こうした地名の警告に耳を傾けることは、我々が自然的存在であることを確認することに他ならない。「自然」は人間にとって、恩恵に満ちた相手であると同時に、時に抗し難い暴力で襲いかかる脅威を兼ねた存在であることは、災害に遭遇して改めて気付かされることである。

このことをあらかじめ知っておくことは、自然に対する人間の驕慢を防ぎ、人間を謙虚にするのに役立つと編者は述べている。

本書の内容は、北海道から、沖縄までの日本列島を大きく5つの区画に分けて、北海道・東北では3名、関東では3名、中部・信越では3名、紀伊では4名、中国・九州・沖縄では4名と、それぞれ各地域の第一人者が執筆を担当している。執筆者の紹介は巻末（277～281頁）にまとめて記載されている。

民俗学者の編者は、地名を「人間の営為が土地に刻んだ足跡である」と定義している。そんな先人の営みが宿った地名も高度経済成長期から進んだ行政による地名変更で、無残に失われてきたという。そこで、編者は「地名を守る会」を立ち上げ、「地名が消えるのは、

村の過去を知っていた古老が死ぬのとほとんどおなじような悲劇である。つまり幾千年以来の歴史はそこで終止符を打つ」と訴え続けた。すなわち、「古老」は天災の語り部でもある。海から離れているのに、津波が遡上（そじょう）した「大船沢」や、古歌通りにその手前で波が止まった「末の松山」と、その重みは東日本大震災で再認識された。本書で編者は、地名とは「人間が大自然の中の存在であることを忘れないようにとの教えである」と説いている。

以下の章では、各地の第一人者による災害地の探索である。目次を「タイトル」、「サブタイトル」、「著者」の順に示す。

北海道・東北

津波常襲地の地名と伝承—三陸海岸が失ったもの遺したもの 川島秀一
自然災害と地名 地震と津波から—三・一一の教訓を読みとる 太宰幸子
釧路地方沿岸の津波災害—体験が語る十勝沖地震とチリ津波 山本修平

関東

地名に隠された「東京津波」—時代遅れの防災対策 谷川彰英
津波による九十九里浜沿岸の被害と地名—3・11と九十九里浜 柴田弘
群馬の災害地名—浅間焼け、弘仁九年地震などの遺した地名 澤口 宏

中部・信越

長野県の活断層と災害地名—災害箇所の子知のために 滝澤主税
愛知・岐阜の災害地名—危険を孕んでいるところ 中根洋治
新潟県における災害の痕跡とその地名—先人の遺した警告 長谷川勲

紀伊

紀伊半島の災害の歴史—石碑の警告 三石 学
熊野川流域の災害と地名—被災地を訪ねて 向井弘晏
那智川の土石流災害と地名—大崩落の調査報告 田中弘倫
水害と地名—紀伊半島を襲った明治と平成の大水害 桑原康宏

中国・九州・沖縄

南風泊その他—海の災害地名 伊藤 彰
熊本白川大水害と北九州豪雨—白川流域に刻まれた災害地名 藤吉 彰
島原大変・肥後迷惑—自然は過去の習慣に忠実である 福田晴男
宮古・八重山の明和天津波—被害概況と関連の地名・遺物 砂川哲雄

東日本大震災以降、防災意識が高まっており、いま自分たちが暮らしているこの町は大丈夫だろうかと心配する人たちも最近増えてきた。

日本は昔から震災や津波、洪水の水害に見舞われてきたわけだが、自然災害は土地の性質に依存し、歴史的に見ても同じ場所で繰り返し起きている。そうした過去の災害の記憶は地名に残されている場合が多い。

たとえば川をはさんで同じ町名があった場合、それは洪水によって分断された水害地域だったことがわかる。

また、「梅」が付く地名は、ほとんどの場合、「埋メ」から来ていると言われ、自然災害によって土砂で埋まった土地か、人工的に埋められた土地を意味するという。大阪の「梅田」などは、元々は湿地帯を埋め立てた土地であり、軟弱な地盤ということがわかるという。

東日本大震災による福島原発事故も、東京電力の原発関係者は「想定外だった」と言っているが、福島第一原発がある福島県双葉郡の北側に位置する「浪江町」という地名は、「浪」はもちろんのこと、「江」は海が陸地に入り組んだ地形を表し、津波被害の危険性が予測できたはずだと指摘する。

さらに言えば、福島第二原発のある「波倉」という地名も波によってえぐられた場所（「くら」は激しく浸食された地形を意味する）も津波地名なのだという。

また、東日本大震災で壊滅的な被害を受けた釜石市や塩竈市の「カマ」とは、古語の「嚙マ」に通じ、津波により湾曲型に侵食された地形を意味する。三陸は50年程度の短い周期で津波に襲われている歴史があり、1611年の慶長三陸地震では、津波が内陸部まで押し寄せ、甚大な被害を出している。

関東では「鎌倉」の「カマ」、「クラ」が同様の意味を持っており、過去に繰り返し津波の被害にあっている。1923年の関東大震災では、6~8メートルの津波が押し寄せ、300人が行方不明となったという。現在の「鎌倉の大仏」が剥き出しになっているのは、繰り返しの津波により大仏殿が流出したことによるのだという。このように地名が持つ抗し難い魅力の一つは、その強烈なイメージの喚起力だと編者は述べる。

しかし、被災地でも、災害地名のない、あるいは少ない被災地域もあり、これらの地域は災害の履歴を残し、今後の防災の資料とすべきであるという。

さて、いま現在、土地購入を考えている人やいま住んでいる土地の安全が気になる人は本書を参考にすることをお薦めする。ただ、本書は、災害に関連する地名が全て網羅されているわけではなく、また該当しないからといって、ただちに安心することもできない。

新興住宅地の地名は、典型的な「イメージアップを狙った地名」がほとんどで、たとえば、「緑ヶ丘」などと命名された新興住宅地でも、緑に囲まれているとはいえ、実際には谷底を造成した埋め立地だったりする。つまり、軟弱な地盤ということであり、このような

土地は、全国的に見ても地滑りや液状化、地盤が沈下し易く、地震に弱いなどの被害が数多く報告されている。

1962年（昭和37年）に自治省が「住所表示に関する法律」を公布施行して、地名改変を許容し、奨励したことによって、戦後日本の大幅な地名の改悪（编者）が急激に始まった。编者はそうした自治省を「民族の敵」と呼び、それに抵抗する全国組織「地名を守る会」を1978年に立ち上げ、「地名の改ざんは歴史の改ざんにつながる」と主張し続けてきた。

本書は、「地名から先人の経験を読みとり、災害に備えよう！」というメッセージに溢れている貴重な書である。その手掛かりとなる土地の形状、地質につけられた小字地名を重視し、それらを活用した地域防災への取り組み、ハザードマップ作りの必要性を著者らは指摘する。

ここで著者らによって取り上げられた地名は、「テーブルにまとめられているもの」や、「文章のままのもの」と著者によって種々雑多な表現が見られるが、参考になる貴重なものが多い。

これらを地区ごとにテーブルに上手くまとめることが出来れば、さらに利用価値の高いものになったはずである。

なにしろ、著者は编者も含めると18名という大所帯なので、内容に一貫性が無いものもあり、一般の読者にとっては少し読み辛い。惜しむらくは、もう少し統一した表現にして欲しかったところである。

なお、编者は2013年8月24日に亡くなっているので、本書は编者最後の著作と考えられる。ここでは编者の下記の著書も参考にした。少し古いがこの種の手掛かりは古いほど価値があるので是非ご覧いただきたい。

参考文献

1. 日本の地名 谷川健一 岩波新書 1997年
2. 続日本の地名 谷川健一 岩波新書 1998年

2013. 11. 29